SHINCLUB 88

(株)辰　東京都渋谷区渋谷3-8-10　JS渋谷ビル5F　　tel/03-3486-1570　　fax/03-3486-1450　　URL:http://www.esna.co.jp

九十九里の家(M 邸)　　サッシを開け放して生まれる大空間

今月のトーク/monthly talk

ネクスト・ステージ

写真の家は、このたび九十九里で施工した週末住宅です。都心から車で1時間半の地、海岸もすぐ近くです。「自然光で写真を撮れる広々とした空間」を望んだ建て主のセカンドハウス兼スタジオとして、心地よい空間が出来上がりました。

設計者であるジェネラルデザインの大堀伸さんに建物についてのお話を伺っているうちに、「ここ何年か、都心から離れた場所の仕事も結構多いんですよ。」という言葉を耳にしました。
沖縄、長野、千葉など、都心を離れた場所に、セカンドハウス、別荘、あるいは自邸を建てる人が少なくないそうです。基本的には 40 歳前後の、仕事をバリバリやってきた人で次のフェーズを求める時期に来ている、といったケースが多いそうですが、なかには若い人もいるようです。「豊かな自然環境」を求めて、そのことにお金をかける価値がある、と考えていらっしゃる人が増えているように感じるそうです。

たとえば、八ヶ岳で 1500 坪くらいの土地を購入されたファッションデザイナーから「テントを張る場所を設計してほしい」という依頼があったそうです。クライアントは、「森の中で暮らしたい。でも大きく土地に手を加えて立派な建物を建てるのではなく、森の中で質素に快適に暮らすための最低限の状況を整えたい」とお考えです。そこで、山の斜面にステージのようなものを設けて、ドーム状のしっかりしたテントを張って過ごすことにしたそうです。そこで、「環境に負荷をかけない山での暮らし方」を研究し、次の自分のブランドギアに生かしたい、と考えていらっしゃるのです。一過性のファッションではなく、次のスタイルとして本当に求められていくべきものをきちんと形にしていくため、自分の実体験が必要だということです。

都心に暮らしていると、人間も自然環境の一部なのだという意識がどんどん希薄になってしまいます。美しい空気や水がごく当たり前のように手に入るこの環境を守るために、やらなくてはならないこと、知っておくべきことはたくさんあります。食べ物一つとってもその安全性が脅かされるニュースが流れると、私たちは実に安易にいろいろなことを人任せにしているのだと気づかされます。都会を離れ、自然の中に身を置くと、いろいろなことがわかります。

都会から離島へ就職した若者がいます。あえて島の役所に就職したのです。都会で仕事をしていた頃の半分の給料になりましたが、ほとんど生活費はかかりません。若者が島の唯一の店でちょっと買い物をすると、お店の人が例えばアジを 10 匹ただでくれます。若者が家にいると、近所の人がしょっちゅう野菜を置いていってくれます。そこの畑でできた野菜です。新鮮そのものです。
ちょっと前の日本では、どこでも見られた風景かもしれません。でも若い人には驚きの連続です。お金をかけなくても暮らしていける方法があるのです。地方は仕事がないと言われていますが、若者が言うには、魚を売ったり、観光客相手のビジネスなどいろいろとできる、というのです。人と人との付き合いの中で、大事なことは何かを学んでいけるのです。

ひと仕事終えてゆとりができた団塊世代、次の仕事の方法を考えている世代、そして自分のこれから生きる場所を求めている若い世代。自然環境の良さを求めて、新たなステージに立つ原動力はそれぞれ違いますが、その「目的」には「自然」という共通のキーワードが流れています。

九十九里の家　M邸

フォトグラファーの週末住宅

敷地のある九十九里は、都心から離れた、風光明媚な土地である。サーファーで埋まる海岸や漁港もあり、馬術クラブの乗馬エリアもある。撮影で何度かこの地を訪れていた建て主は、ファッション雑誌などで活躍する写真家。かねてから自然光で撮影のできる大きなスタジオを作りたいと考えていた。旧知の大堀氏設計のいくつかの住宅が撮影に適したスタジオとしても機能すると考え、 お気に入りのこの土地にスタジオを兼ねた週末用のセカンドハウスを建てたいと設計を依頼した。

「敷地周辺は冬は人は少なく荒涼とした風景が広がり、夏は逆に多くの海水浴客で賑わう。海に近い約 450 坪の平坦な敷地は設計のよりどころを見つけることが難しい。海の見えるタワー状の建物など、いくつかの建ち方の検討を経て、四つの中庭を持つ 25m×31m の大きさの平屋のコートハウスを提案した。自然光がきれいにまわる空間、というクライアントからのリクエストに対して、建物の四隅に配置したこの中庭からの自然光は一日中建物のどこかにまわりこむ。全開放できる木製サッシにより中庭へと連続してゆく空間とそれを緩やかに分節する壁、そして垂直方向へ抜けるトップライトにより、いろんな光の表情をもった空間が体験できる。」

（大堀伸氏　談）

①外観②建物入口③正面エントランス。④東南の庭。屋上へ外階段がつけられている。⑤北側庭よりメインリビングを臨む。3 枚の木窓のサッシは開口部右側に収められている。⑥寝室に続くバスルーム。⑦北側廊下。トップライトが利いている。⑧南側空間。壁には極力突起物がないよう、エアコンの噴出し口も目立たないスリットだけになっている。

構造：RC造　地上１階
用途：専用住宅
設計：大堀伸／ジェネラルデザイン
完成：2007年6月

建築のデザイン　一級建築士事務所㈱山中デザイン研究所

山中玄三郎　　profile

和歌山県新宮市生まれ

1963年3月　多摩美術大学デザイン科卒業
1963年4月　高島屋百貨店設計部入社
1977年4月　北海道東海大学芸術工学部助教授
1980年　　山中デザイン研究所設立
1993年　　多摩美術大学デザイン学科教授に就任
　　設計実務と教職を兼職して現在に至る。

一級建築士事務所（株）山中デザイン研究所代表取締役
多摩美術大学デザイン学科教授
新日本建築家協会正会員

—今月は「ARCO　CASA」の設計者、山中玄三郎氏にお話を伺います。

—多摩美術大学のご出身で、 現在教鞭も取っていらっしゃいますね。
山中：建築の設計には技術系とデザイン系があって、 私はデザインの方から入っています。 スペースデザインというか、 インテリアやパブリックな公園、 建築など、 時にはアートというインスタレーションも含めていろいろと空間全体をデザインしているといえるでしょう。

多摩美大は現在、美術学部（昼間部）が八王子に移転していますが、もともとあった上野毛校舎にも社会人や中高年者の再教育の場として造形表現学部（夜間）があり、私はその中のデザイン学科で教えています。約 100 人の学生の半分が、 いったん社会に出た人たちですね。 中には技術系の大学を出て、 一級建築士の資格も持っていながら、 もう一度デザインを学びなおしたいと入学してきた学生もいます。 さまざまな年齢層の人がいるというのは、 一般入試で入った若い学生たちにも良い刺激になっていると思います。 日本でこういう大学はほとんどないでしょう。 場所も都心に近く、 便利です。 私自身もこうやって事務所で仕事を抱えながら、 仕事が両立できるわけですね。

—実際に現役でバリバリと仕事をされている先生から教わることは、 生徒さんにとって、 とても有意義なことでしょうね。 それに最近は、 高校までにいろいろと身につけるべきことが身についていない幼い学生も多く、大学の先生もしつけなどで苦労されているという話も聞きますから、 その点の気遣いは無用ですね。

山中：問題意識のある人が多いので面白いですね。 それから「指名コンペ」などで実際の経験をつんでもらう。 下手な授業より、 よっぽど勉強になります。

事務所では、 仕事というのはある程度小さなボリュームのものを同時にやっていかなくてはならず、 作家的なゆとりと仕事としてのバランスが難しいのですが、 常に同じパターンというのは避けたいと考えています。その建物ごとに独自の解釈があるわけで、 建てる方は一生に一度の大仕事ですから、「山中スタイル」というひとくくりにして設計してしまうことは、 失礼ですね。
特に住宅は人が反映されますから、 クライアントと一緒に作っていく、という感じですね。 ロケーションや施主の性格だとか、 それぞれ解が異なる。 子供と同じで、 運動が得意な子、 内側にこもって自分の世界に浸る子、 といろいろ個性があるじゃないですか。 そしてひとたび建ったら、 30 年から 50 年は建ち続けるわけでしょう。 周囲に対して良い影響がなければならない。いいものが建つと、町並みは絶対良くなります。

これはすぐにはわからないのですけど、 5 年から 10 年経つと明らかに良くなります。 だから、いつも新しいことにチャレンジして、 良い建物にしたいと考えています。 その建物のすべてとは言わない。 1 割でもいい。 何か新しいことを考えていきたい。 そう考えていかないと、 すぐにマンネリになってしまうものです。

—長年お仕事を続けていらっしゃる先生のお言葉だと、 ほんとにそのとおりだと考えさせられます。

山中：いくつかの作品についてご紹介しましょう。 例えばこの3世代の家（写真①）は木造ですが、 一見すると木造には見えない。 しかし、 中庭を介して独立した個性的な3家族の家が入っています。 大型犬を飼う母の家、 ピアノのある家、 メゾネットの家、 という3つの家がうまく納まっています。 木造の家のイメージというと、 例えば幼児に絵を描かせたらほとんどの子供が描くであろう日本家屋の典型というべき切妻造の家がありますね。 しかし木造でもそうではないものもありえる。 もっと自由な家づくりができるということなのです。
こちらの Colore（コローレ）という建物（写真②）は、外観にカラーグラデーションの色をつけ、建物に表情をつけたワンルームの賃貸マンションとオーナーの住宅で構成されています。

—外壁の色使いが楽しいですね。 本日はどうもありがとうございました。

①奥沢の家（3世帯家族の家）

②Colore(コローレ)

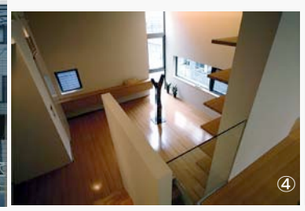
ARCO CASA

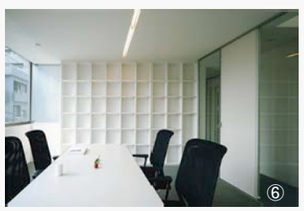
墨田区の SOHO

建物は、 税理士である建て主の自宅兼オフィスである。 15,6 年前近くに建てた賃貸物件を2戸借りられ、 設計を気に入ってくださっていたため今回のお話をいただいた。
建物の形は夜帰宅する建て主を明るく迎え入れる「行灯」をイメージした。 エントランスも兼ねるガレージの部分は明るい照明に加え、 壁に小さな穴を設けてアクリルを差込み、 常夜灯として遊び心を持たせている。

シンプルな箱である外観に対し、 内部は3 m 以上ある天井高を生かして1階と2階の住居部分で床に高低差をつけている。 1階はピロティ、 エントランス、 ご両親のための予備室だが、 個室は賃貸としても利用可能である。 2階は建て主の書斎と和室がスキップフロアで居間に連なっている。 ふんだんに設けた本棚の存在感を予測し、天井に照明を置かない間接照明としている。 床の木の色や壁の珪藻土が暖かみのある空間を創出しているが、ドメスティックな印象にならないように仕切りもほとんどないオープンな空間とした。
１日のうち一番長く滞在することになるオフィスを、 最上階の3階に配置した。 打ち合わせを行い、 日々の業務のための参考図書が置ける空間であり、こちらも照明を埋め込んだすっきりとした空間になっている。 こちらにもバスルームを置き、 賃貸への転用を可能にしている。 ホームエレベータを設置しているため、 地下の書庫への移動もスムーズに行われる。

地下室はそのまま作ると暗くなる。 階段室部分にガラスブロックを用い、 光をたっぷりと入れた。 書庫棚が入ればほとんど見えなくなる床だが、 真っ赤な P タイルで陰気になりがちな地下室に明快さを加えた。 ウッドデッキを入れた屋上も心地よい空間になっている。
ガラス、 コンクリート、 ステンレス、 とそれぞれの機能を生かす本物の素材を用いたこの SOHO 的なビルが、 周辺によいイメージを与え続けていくことができればと願っている。　（山中玄三郎氏　談）





構造：RC造
地下１階　地上３階
用途：専用住宅＋事務所
設計：山中玄三郎
／山中デザイン研究所
担当：水野芳康
完成：2007年6月
撮影：畑亮

①外観②正面夜景③正面昼景④2階居間から和室と書斎を臨む。 右側がバスルーム、 エレベーターホール。⑤和室から居間を臨む。⑥3階オフィス。

私の1週間㉑　辰の現場監督が毎回登場します。

入社して一年。休みらしい休みも取らずにいたが、六月十一日に平塚の現場が落ち着いたので、次の現場まで会社から長期休暇をいただき、学生時代成し遂げられなかった「海外一人旅」を計画する。行き先は今、経済発展著しい中国。上海・北京への旅。

六月十六日（土）
名古屋空港から上海に旅立つ。早くも行きの機内で旅行バッグを壊してしまうという最大のピンチ。仕方が無く上海の街中に着いてから、速攻、バッグを買いに行く。日本で一万円しか両替してないのに八千円で購入。日も暮れ、急いで宿を探さなくてはならない。ネオン輝く雑踏の中、「オニイサン、カワイイコ、イルヨ」をひたすら無視し、ガイドブックに載っている安宿に到着したのが夜の九時。満員で泊まれないと断られるが、そこにいたオーストラリア人がほかの宿を教えてくれ、しかも残りの二千円では泊まれないので、日本円を人民元に変えてくれる手はずまでしてくれた。感謝、感謝。

六月十七日（日）
上海という町は日本に比べて汚く空気が淀んでいる。あちこちに高層ビルの現場があって、鉄骨の梁をタワークレーンで百メートル近くまで上げてくるなどスケールがでかい。こちらの現場ではさすがに竹の単管はないようだが、まだ一部足場板に竹を編んだものを利用している。しかし筋交もしっかり入れて丈夫そうである。

六月十八日（月）
今日は東洋のベニスといわれる「周荘」、上海から車で2時間の村を観光。先日からドミトリー形式の一泊七十元の安宿に宿泊。

池山　幹人
中国一人旅で
見聞を広める

インド、中国、オーストラリア人などの外国人が同宿している。自己紹介は必須。「Where you from?」から始まり、この先の予定など旅の日程を伝えあうが、英語ができない僕は後が続かない。やはり英語ができたらなぁと思う。が、同じぐらいの英語力の中国人と漢字とジェスチャーを織り交ぜ、コミュニケーションをはかる。意外に通じるので変な自信が着いた。マルコポーロの時代はお互いの言葉をこうやって覚えたに違いないのだ。

六月十九日（火）
江南を代表する名園「豫園」を見学、園内の龍や獅子はマスコットみたいでかわいらしい。

六月二十日（水）
昼に北京空港に到着。やはりこちらも曇っていて、黄砂の影響だろうか視界が悪い。バスを降りて息を吸えるか心配になった。今回は早めに宿を探し、すんなりチェックイン。あえて欧米人が多いドミトリーの安宿を選んだ。早速アメリカ人とビリヤードを試みる。今回の旅で一貫して思ったのだが、彼らは日本と中国の関係が気になるようだ。とりあえず「フレンドリーだ」とだけ答えておいた。

六月二十一日（水）
故宮を見学、屋根の色、重なり、柱梁の装飾、ここにある全ての美を目に焼きつけた。

六月二十二日（木）
慌てて正午起床。この旅の一番の目的、建設中のCCTV（中国中央電視台）と北京スタジアムを見にいく。写真を撮りまくった。

六月二十三日（金）
宿が企画している、万里の長城のツアーに、前々日に知り合った日本人の姉妹と参加。十一人の欧米人と二つのバンでふもとまで向かった。現地の村の長老らしき人に案内され皆で息を切らせながら万里の長城を目指す。上りきったときは達成感があった。

六月二十四日（土）
帰国。自信に繋がり色々な世界を見られた有意義な旅だった。

1982年　静岡県生まれ
2006年　東京造形大学デザイン学科卒業
担当した主な物件（設計者）
高久ビル　（ユニホー一級建築士事務所）

TOPICS/INFORMATION

「称名寺　本堂建替工事」　地鎮式　　7月3日

春日部市南部地域の老朽化した本堂の建替を壇教徒の皆さんの（写真の通り）の期待を一身に背負い、本格的なRC+S造で後世に残る建物として来年3月末の竣工を目指します。

構造：RC造＋S造
規模：地上2階
用途：宗教施設
設計：岩倉秀一
／岩倉建築設計事務所
完成予定：2008年3月

「新入社員が入りました」

新入社員がはいりました。よろしくお願いいたします。

建築部
奥村光寛

開発営業部
E&D
幡野瑠里

「夏季休暇のお知らせ」

8月11日(金)～15日(水)　まで夏季休暇とさせていただきます。

編集後記

・山中デザイン事務所は弊社が以前施工した、世田谷区の「Cubic」という集合住宅のすぐ近くにあり、弊社の現場員の仕事ぶりをずっとご覧になっていて見積のご依頼をくださいました。 日々の仕事が評価され、 担当者も建築屋冥利につきることでしょう。
・九十九里の家の撮影に行きました。 あいにくの曇り空でしたが、 白い建物はどこもかしこも魅力的な撮影ポイントでした。 近くの漁港の魚料理はなかなかでした。
・右の写真は、 上記の「私の1週間」に登場した池山係員が撮影した北京オリンピックの国立競技場の写真です。 ヘルツォーク&ド・ムーロンの設計で、 来年のオリンピックまでには完成予定。「鳥の巣」という愛称のとおり、 巨大な鉄骨が縦横無尽に走っています。